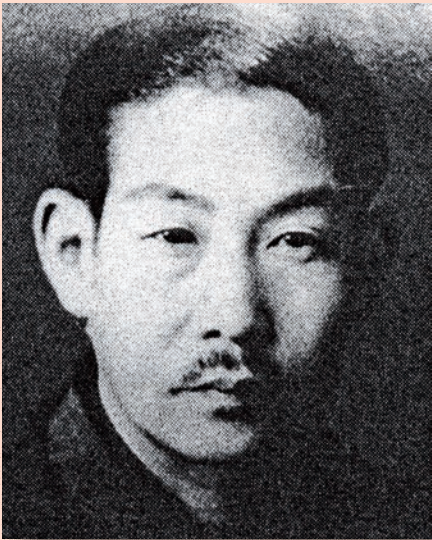


短歌

いく たちょう すけ
生田 蝶 介

下 関 市
(1889～1976)



【著作】

歌集『渦潮』（大正11・博文館）
『聖火燃ゆ』（昭和3・福永書店）
『生田蝶介全歌集』（平成2・短歌新聞社）ほか

【閲覧情報】

下関市立中央図書館・下関市立長府図書館

歌人であり詩人、小説家と幅広い文学活動が続けた生田蝶介は、明治二十二年（一八八九）五月二十六日、山口県長府姥ヶ懐（現・下関市長府）に生まれた。父守一、母津智の次男。本名調介。家は代々毛利家に仕え、祖父伝右衛門は納戸役、父は、明治維新後、塩田事業を開拓した。十三歳で京都へ出て、叔父田島家の養子となり、吉田中学校へ入学。田島曲琴の名で『中学文壇』に短歌を投稿入選。のち、早稲田大学英文科に入学、同級に坪田譲治がいた。このころ、夏目漱石、小川未明、吉井勇等を知る。

明治四十二年（一九〇九）博文館入社。二十二歳で処女創作「政ちやんの死と其の前後」を『スバル』に、詩「石嶮玉売り」を『白樺』へ発表するなど、新進気鋭の文学者として文壇に登場した。また、小説評と演劇評を『白樺』に毎号連載という、評論家としての地位も築いていった。のちに、『講談雑誌』を創刊し、歌壇欄を設け、多くの短歌愛好者を育てていったが、異色などころでは、日本画家の伊東深水や小説家で劇作家でもある川口松太郎、挿絵画家の岩田専太郎等も育てている。

大正十三年（一九二四）、短歌誌『吾妹』を創刊、主宰するなど、歌人として大正・昭和期の歌壇に大きい業績を残したといえるが、それにもまして、後進の育成に情熱を注いだ。彼が定めた「吾妹歌憲」がある。三百六十三字に及ぶ歌憲は、短歌創作の心得としたものであるが、歌を愛し、人を愛した彼の人柄が偲ばれる。

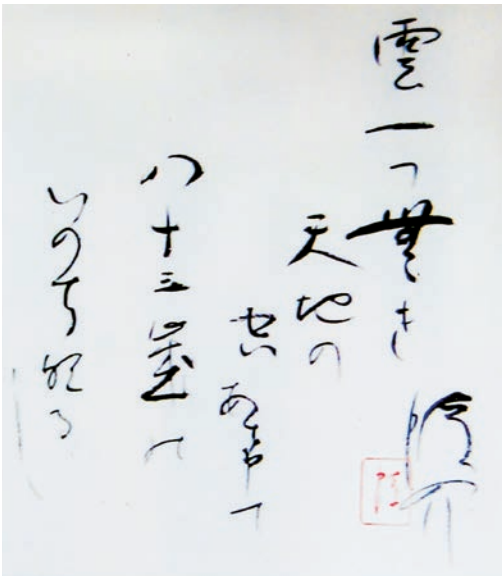
「短歌は一人の道にして万人の道なり。（略）老若の差なく男女の別なく学歴不問たり。すべて同人同席（略）遅々たるを恥づるなく、速かなるを誇るなし。その一步一步を踏むにいのちありて鳴る。（略）美は天地に充つ。おのれの対象に全愛の瞳を開け。」（吾妹歌憲より）

昭和五十一年（一九七六）五月二日、長府覚苑寺に十番目の歌碑「ふるさとの赤松山のおもひでの松の匂ひをしのぶ秋の日」を建立。全国に渉り十一基の歌碑がある。翌三日永眠、享年八十七歳。毎年五月に「蝶介忌」が行われる。

（文・野村忠司）



生誕地の下関市長府に10番目の歌碑建立



直筆色紙

生田 蝶 介 年 譜

（提供・野村忠司）

天に凝る秋の気なれやひとところ

むらがる雲は山をつつめり

月の夜を妻と散歩の道にして

妻をつれたる子とあひにけり

秋かぜの吹きすぐるときわが肩を

打ちて落ちたる松かさ一つ

人麻呂の嘆きをらかに聞きており

暦日もなき山の秋雨

水の上をゆるく流るる花びらは

みづにもぬれずかがやきにけり

ふるさとの赤松山のおもひ出の

松の匂ひをしのぶ秋の日

『生田蝶介全歌集』（短歌新聞社）抜粋

明治22（一八八九年） 明治35（一九〇二年）	一三歳
明治40（一九〇七年） 明治42（一九〇九年） 明治44（一九一一年）	一八歳 二〇歳 二二歳
明治45（一九一二年） 大正5（一九一六年） 大正10（一九二一年）	二三歳 二七歳 三二歳
大正12（一九二三年） 大正13（一九二四年）	三四歳 三五歳
大正14（一九二五年）	三六歳
大正15（一九二六年） 昭和2（一九二七年） 昭和3（一九二八年） 昭和4（一九二九年）	三七歳 三八歳 三九歳 四〇歳
昭和6（一九三一年）	四二歳
昭和8（一九三三年） 昭和16（一九四一年） 昭和20（一九四五年） 昭和25（一九五〇年） 昭和28（一九五三年） 昭和30（一九五五年） 昭和40（一九六五年） 昭和45（一九七〇年） 昭和47（一九七二年） 昭和51（一九七六年）	四四歳 五二歳 五六歳 六一歳 六四歳 六六歳 七六歳 八一歳 八三歳 八六歳

5月26日、山口県長府姥ヶ懐（現・下関市長府）に生まれる。父守一、母津智の次男。本名調介。京都へ出て、田島志一の養子となる。吉田中学校入学。田島曲琴の名で『中学文壇』に短歌投稿、入選。

早稲田大学英文科に入学。同級に坪田譲治がいた。博文館入社（臨時社員）。博文館正社員。処女創作を『スバル』に発表。詩を『白樺』へ発表。同時に小説評や演劇評を毎号連載し、生田蝶介の名が知られる。

香川県坂出市出身の高木峯子と結婚。

11月第一歌集『長旅』を上梓。以後第九歌集までを刊行。博文館より『講談雑誌』を編集責任者として出版、短歌欄を設ける。（雑誌に短歌欄ができた嚆矢である。）

9月関東大震災にて浅草今戸の家が罹災。無一物になり中野へ移る。

東京市豊多摩郡中野町に、全芸術社と新短歌社を設立。文芸誌『獵人』、短歌誌『吾妹』を創刊。

5月『吾妹』創刊記念短歌大会を銀座レストラン松月で開催。

『吾妹』支社が高知、京都、茨城、神戸に設立。12月吾妹叢書第一編として、生田蝶介、楠田敏郎、矢嶋歙一合著『山帰来』上梓。12月13日、妻峯子死す。

妻の妹高木マサエと結婚。

博文館編集次長の職を辞す。

1月長編小説『聖火燃ゆ』出版。7月『作歌入門』出版。

4月『短歌用語辞典』10月『短歌文法七十講』出版。『現代日本文学全集第38篇現代短歌集』（改造社刊）に北原白秋、石川啄木らとともに収録さる。

8月第一歌碑が山形市山寺（立石寺）に建立。12月吾妹社「蝶」の徽章を制定。平凡社より『生田蝶介集（大衆文学全集第17巻）』上梓。

5月『吾妹』十周年大会を日本青年会館で開催、参加者八百名。

5月陸軍第一病院慰問歌会。10月『吾妹』二百号。

東京空襲により渋谷区神宮前の獵人荘（住宅）焼失。蔵書全てを失う。

日本各種学校連合会文化部と合流歌会あり、生田蝶介、川田順、柳原白蓮が指導にあたる。

11月日本文化放送にて「わが道五十一年」を川田順と対話。

1月12日宮中歌会に召人として参内する。

3月日本歌人クラブ名誉会員に推される。

5月第一回蝶介祭（吾妹全国大会）を足柄山で開催。

『吾妹』五十周年記念大会を足柄労金センターで開催。9月『吾妹五十年のあゆみ』を刊行。

5月2日故郷の下関市長府覚苑寺に第十歌碑を建立。

翌5月3日永眠。毎年忌月5月を「蝶介忌」として供養することに決定。

5月第九歌集『白鳥座以後』を刊行。5月14日東京都葛飾区木川下葉師に第十一歌碑建立。

11月3日『生田蝶介全歌集』刊行。

1月『吾妹創刊80周年記念特集』出版。